

お散歩感覚で
鯖江の市民活動がわがっちゃらブックレット

OSANPO

～2歩目～





■福井*カメラ女子の会...6p



■さばコン...4p



■さわやかさはえボランティア虹...8p



■鯖江子ども劇場...10p



■xGC...12p 写真提供:xGC



■ザリガニ捕獲大作戦☆...15p



■コミュニティ・レストラン
全国フォーラム...14p



■小さな種・こころ
...16p



■バックステージ
座談会...22p



■おもちゃ病院...20p



■NPOエル・コミュニティ...18p

目次

巻頭特集「さばコン」	4p-5p
団体紹介①「福井*カメラ女子の会」	6p-7p
団体紹介②「(特活)さわやかさはえ ボランティア虹」	8p-9p
団体紹介③「鯖江子ども劇場」	10p-11p
団体紹介④「xGC」	12p-13p
イベント報告「コミュニティ・レストラン 全国フォーラム2012」 「ザリガニ捕獲大作戦☆」	14p 15p
団体紹介⑤「(特活)小さな種・こころ」	16p-17p
団体紹介⑥「(特活)NPO エル・コミュニティ」	18p-19p
事業紹介「おもちゃ病院」	20p-21p
バックステージ座談会	22p-23p

『OSANPO』について

■ぶらり“お散歩”感覚で、さばえのNPOや市民活動のことが、気軽に楽しくわかる...それが、「OSANPO」のコンセプトです。
■タイトルに隠れた「NPO」(非営利で活動する組織)は、実は身近な存在で、その気になれば、今すぐ、誰でも参加することができます。
...そう、まるで“お散歩”のように☆...





▶お店ごとに趣向を凝らしたお料理

緊張をほぐしてくれたのは各店舗自慢の料理。鯖江産の吉川なすや、お米(つつじの舞)を素材に、趣向を凝らしたオリジナルメニューも花を添えます。料理やサービスを通して参加者たちを後押しする、お店側の心意気もピンピン伝わって来るようでした。

気がつけば、あちこちで交わされる笑顔と会話と乾杯の声。

2店舗目に移動する頃には、どんな話の弾むテーブルが多くなり、男女の出会いを作る『さばコン』が姿を見せられました。

そして最後の1時間半は、好きな店舗に移動できるフリータイム! 仲良くなった参加者同士で新しいお店を探検したり、店にとどまってじっくりコミュニケーションを楽しんだり、それぞれが心地よい時間を紡いでいたようです。

『料理と会話と乾杯と』



▲好きな食べ物、取ってきてあげるネ

◆巻頭特集◆



みなもの者

出会え! 出会え!!

『さばコン』大開催。



▲公式マスコット『鯖こん』

さばコン



主催: NPO法人さばえNPOサポート
日時: 平成24年9月9日(日) 15時~
場所: 鯖江市内の10店舗

鯖江で初めて、まちぐるみで行われた巨大台コン『さばコン』! 総勢240名の参加者が、美味しく楽しく盛り上がりました☆

『緊張?のスタート』

まだまだ残暑の厳しい日曜日。鯖江市鶴陽会館の駐車場に続々と参加者たちが集合してきました。

市内3エリアの、計10店舗を舞台に開催されたこのイベントでは、チャーターバスが重要な移動手段。スタート時には、この鶴陽会館から各エリアへ送迎があります。

出発時、バスの中は思いのほかとても静か。まわりを見れば、若者たちが

2人1組で歩く姿が至るところで見られ、まち全体の雰囲気も普段とチョット違います。

さて、各店舗では、受付を済ませて開始時間を心待ちにする参加者たちが待機中。お店の扉が開くたび「どんな人が来たのかな?」と気になりつつも振り向けない(??)女の子たちの気持ちは見えるようです。

そして、緊張感漂いつつも密かに熱が上がるなか、午後3時の合図とともに『さばコン』は静かにスタートしました。

『ごろんな“おまご”の日』

男女の出会いはもちろん、まちの活性化や地元ブランドのアピールも絡めた『さばコン』には、会場となったお店以外にも、社会福祉協議会や青年会議所、行政、商工会議所、ボランティアのスタッフなど、様々な立場の組織や人々が関わってくれました。

一方、自分たちで、ほぼイチから組み上げた企画ということもあり、当日には色々な課題が見えてきたことも事実です。

それでも、まちぐるみで盛り上げてくれた時間空間で、参加者の多くは異性とも、お店とも、『鯖江』というまちとも『出会い』を楽しんでくれたに違いありません。

夜になり、コラボ企画のひとつ『さばえ秋HANABI』に咲く大輪の光の華を見ながら、そんな鯖江というまちの持つ大きな可能性を、あらためて感じた一日でもありました。



▶多くの参加者が「さばえ秋HANABI」も堪能しました



カメラは楽し。

花咲け乙女♥



ファインダーを覗けば…
写真提供：福井*カメラ女子の会

福井*カメラ女子の会

教育 文化 その他

「カメラを買ったけれど、いろんな機能があっても使い方がよくわからない」「こんなふうに写真を撮るには、どうしたらいいの?」「カメラ教室って、男性が多そう…」。「こんな写真撮ったよ」って、仲間と気持ちを共有したい」
そんな思いから始まった『福井*カメラ女子の会』。発足から2年が経ち、その趣旨に共感した写真を撮ることが好きな女性の輪が、今も広がり続けています。代表の寺下有花さんに、お話を伺いました。

『はじまりはネットから』

もともと写真を撮ることが好きだった寺下さん。

「作品をブログにアップしたりもしていたんですが、更に素敵な写真を撮りたい!と思い、デジタル一眼レフカメラを購入しました。」

でも、ボタンの使い方や機能がよくわからず、カメラ教室に通おうかなとも思いましたが、料金や男性ユーザーの多さにちよっぴりとまどつて…

それで女同士でワイワイ話しながら、わからないことを教え合ったりできないかな?…って思い立ったんです。ツイッターなどネット上で呼びかけたところ、思った以上の反応があり、それが会の発足へとつながりました。

『リアルに会って楽しもう』

カメラ講座や写真展を定期的で開催していますが、そのあとに必ず『女子

会』。お喋りタイム。があります。実は、これがこの団体が一番大切にしている時間。

いろんな人とつながり、同じ趣味を持つ仲間を作り、みんなとの楽しい時間を共有することこそ、会のミッションだと言っている寺下さん。『カメラ好きな人』孤高の芸術家』のようなイメージもありますが、みんな写真を楽しんだり、わからないことの共有、ゆるく人と人がつながっていくことも、すごく大切にしています。

「高度な撮影技術を身につけたいというより『カメラライフを楽しみたい』という会員さんが多いので、極端に難しいカメラ話はしなくていいです。」

写真を撮ることを楽しむというより、写真を撮りながら、自分の生活や仲間とのつながりを楽しんでいくことが好き。写真を通じて思いを共有できた、会話がうまれることが好き。気持ちを共有するためのアイテムとして、写真がすごく好きなんです。」

たり、コミュニケーションを楽しんでいます。会員は、年齢制限なしで20〜40歳が多く、中には両親のカメラを持って楽しんでる10歳の子供さんもいます。子育て世代の方も多く、子供さんを撮りたいことがきっかけで入会される方も多いそうです。

『日本*カメラ女子の会?』

他県から「こんな活動が地元にもあったらいいな」というコメントが届くことも度々。そんな寺下さんに今後の目標を聞くと…

「福井以外の皆さんにノウハウをお渡しして『カメラ女子』の輪を広げていけたらいいななんても考えてます。」

会名に『*』をつけたのは、最初はちょっと可愛いかも…くらいのつもりでしたが、今は、『*』の前に福井以外の地域名がついて、カメラ女子の輪がどんどん広がっていきば…という思いがありますね。」

その他、『会員一人一人のリンクエストにもっと応えたい。』『大らかさは大切にしながら組織化して、運営やイベントなどに活かせるようにしたい。』など、想いは、まだまだ大きく膨らみそう。



▲2012年秋に開催された5回目の写真展「ココロほっこり展」

『2年も経たずに会員250人超!』

メディアにとりあげられたことや、『カメラ女子』という言葉が雑誌等ブームになったこともあって、あっという間に会員は250人を超えました。その多くは、ホームページや口コミ、フェイスブックのグループを通じてのつながりで、今もネット上では、みんなが写真を公開したりコメントをいれ

「カメラと一緒に年を重ねて、おばあちゃんになっても写真を撮っていたいですね。最近では、外国人の方や車椅子の方も参加されたり…自分の好きなことが、結果的に人や地域のコミュニティ作りになっていることがあるのかも。」と、にこやかに話す寺下さん。そのレンズで、新しい時代の、新しい形の市民活動を捉えているのかもしれない。



▲2周年を迎えて「はい、チーズ☆」 写真提供：福井*カメラ女子の会

〒916-0073 鯖江市下野田町4-1-3
福井*カメラ女子の会事務局
TEL:0778-62-3793
(株)ウオントツ内 寺下まで
http://deji1.jp/camera_joshi/
yun@wants.jp



正会員募集中!

- 代表者…寺下 有花
- 活動開始…2011年2月
- 正会員数…250名超(2013年3月現在)
- 賛助会員…なし

◎活動目的

カメラ大好きな女子が集まり交流し合うことで、本人やその家族が、より豊かで楽しい人生を送れることを目指します。

◆他団体イベントでの写真撮影担当

様々なイベントなどで依頼され、記録の写真を撮影しています。女性ならではの視点で押されるシャッターからは、生き生きとした瞬間が切り取られてきます。
・「さばえ秋HANABI」
・「そうだ!川に行こう!」の公式撮影隊としても活躍しました。

これまでいろいろな活動もしています



助け合いで支える 絆の地域づくり



特定非営利活動法人
さわやかさばえ
ボランティア虹



介護保険事業をしながら、行政のシステムでは埋められない、きめ細かなサポートも提供する。ふたつの立場を持つからこそできるこの活動が、ボランティア虹の大きな柱です。
代表の天谷さんをはじめ、会員やスタッフの方々にも、たくさんのお話を聞きました。

『昔にもどろう』

その昔、ご近所どうしの助け合いは当たり前でした。しかし、最近では付き合いが希薄になり、地域社会から取り残される人たちも増えていきます。このような方たちへのサポートは、行政のサービスや民間に委ねられているのが現状ですが、それにも限界があり、民間の施設も不足しています。昨今の予算不足や不景気が、その問題をより深刻にしているとも言われます。「なんとか、ひとりひとりの絆をつなぎ直して、みんなで一緒に暮らせる地域を実現できないかなあって思ったんですよね。」

2002年にボランティアを主体とした活動を開始。失われた「繋がり」への思いを『昔にもどろう』の合い言葉に込めました。

『対等に助け合ってる』

活動の基本は、『助け合いによって地域のみながしあわせになる』こと。



代表の天谷さん

そのための柱の一つとして『助け合い事業』があります。これは、会員のお宅に担当者が訪問し、介護保険などで対応の難しい、掃除、洗濯、料理、買い物などの家事支援や、話し相手、介護・介助支援、外出支援など幅広いサポートをする内容です。
訪問スタッフの一人が話してくれました。
「介護保険とかで対応できるお仕事には細かい決まりがあって、どうしても『もう少ししてあげたい部分があるの』に『みたいなこともあるんですよ』でも、そこを『助け合い事業』でカバーできるから、お手伝いしている自分も納得できるんです。」
ただし、決して『なんでも屋さん』ではないと天谷さんは言います。

『7つのすすめ』

「サービスを提供する方も受けられる方も、両方とも『会員』さんなんです。だから、『クライアントと業者』じゃなくて、お互い対等な立場として『助け合ってる』という考え方がいいです。」

これらの支援活動の利用には会員登録と料金が要で、いわゆる『有償ボランティア』として運営しています。

活動に参加するほど訪問する会員さんが消耗していくのでは本末転倒です。事業へのモチベーションを維持するためにも役立つからです。

現場をよく知っているからこそそのパランス感覚。そして、その奥に流れる『理念』が、『虹』の存在を特別なものにしていくのかもしれない。

「ボランティア」とは、もともと『公共的な目的のために、自分から進んで行う』ことです。
『虹』ではさらに『7つのすすめ』を掲げてボランティアの意味を掘り下げています。

- ① ボランティアは、自分の思いを大切に参加しましょう。
- ② ボランティアは、相手の気持ちを一番に考えましょう。
- ③ ボランティアは、楽しんで活動しましょう。
- ④ ボランティアは、責任を持って行動しましょう。
- ⑤ ボランティアは、進んで意見をいみましょう。
- ⑥ ボランティアは、みんなの言葉に耳を傾けましょう。
- ⑦ ボランティアは、失敗から学びましょう。

短いながらも、それぞれに含蓄の深い余韻があります。
『虹』に関わるボランティアは、どうあるべきなのか：発足以来、そのことについてずっと問いかけを続けていくことが伝わる内容で、きっと市民活動に携わる多くの人間が学ぶべき部分もありそうです。

◆ さばえわたぼうしコンサート
障がいを持つ皆さんの思いを綴った歌詞に曲をつけ、コンサートで発表。
ユニバーサルな視点から、音楽を通して、様々な立場の人たちの気持ちを共有することができるコンサートです。

◆ 寄付文化普及のための勉強会「地域の絆づくり円卓会議」
“寄付”によるまちづくりや社会参画への意識を普及させることを目的に、他団体との意見交換や勉強会、講演会などを実施しました。

これまで
こんな活動も
つづけて

〒916-0068
鯖江市二丁掛町14-28
TEL: 0778-62-4177
FAX: 0778-62-4178
http://www4.ttn.ne.jp/~tjn_nmkf_s/sawayaka.n@wt.ttn.ne.jp

正会員募集中!
賛助会員募集中!
ボランティア募集中!

● 代表者…天谷 まり子
● 活動開始…2002年4月21日
● 正会員数…120名(2013年3月現在)
● 賛助会員…なし

◎活動目的
地域たすけあいの心を根底に置き、ノーマライゼーションの社会構築による「幸せな地域づくり」を目指しています。

「人生は『やまびこ』やね。『バカ』と言えば『バカ』と言われるし、『ありがとう』と言ったら『ありがとう』と返ってもらえるものやからね。」
それこそが『虹』の目指す『助け合い』の根本なのかもしれません。またそれは、代表の天谷さんを始め『虹』の多くの皆さんから感じられる『謙虚さ』とも通じるものでした。
思いやりにあふれた視点で、助け合いの地域を創り上げていく。
天谷さんの瞳は、きっとそんな未来を信じ、見据えているに違いありません。

育てて育てて育てて

地域も育つ。

鯖江が私たちの「劇場」!!



▼平成24年度の人形劇公演(主催:鯖江市福祉の地域づくり推進協議会・鯖江子ども劇場)
写真提供:鯖江子ども劇場

さばえこ げきじょう
鯖江子ども劇場

まちづくり 教育 文化

もしかすると、かつてこの団体の会員さんだったお母さんたちも多いのではないのでしょうか?
また、お母さんと一緒に劇を観に行った記憶のある若い人たちもいるのでは?
そんな思い出の「縁の下の力持ち」をしていたのが、「鯖江子ども劇場」です。

『今も溢れる思いとともに』

取材をさせていただいたのは、事務局長の米谷さん。これまで実務や調整役を務めてきました。
そして、今までの活動内容を語り始めたその時から、ほぼ2時間以上にわたって流れるように溢れ出す言葉の中、子ども劇場の持つ「思い」の深さを体感することが出来ました。

『本物が大切!』

活動開始から四半世紀以上になる鯖江子ども劇場の活動は、芸術や文化の視点から子どもと地域を育てる事業が中心。

福井県で最初にNPO法人を取得した「福井県子どもNPOセンター」の団体正会員でもあります。
発足時は、多くの子どもと、お母さんが会員として参加し、長い間、その会員を対象にした演劇や人形劇などの公演を行ってきました。
「当時は、今みたいに、いつでも簡単

にエンタテイメントの作品に触れることって少なかったですもんね。」

レンタルビデオやネットでのオンデマンド配信が「普通」になった今とは、社会状況も全く違っていたはず。そんな時代の観劇は、今の私たちが思うより、はるかに特別なものだったことでしょう。

ただ、そんな現代でも、本物の舞台を観ることはとっても大切だと米谷さんは言います。

「やっぱり、テレビ画面や携帯端末を通して観ると、同じ空間で肌を感じながら観るのでは、全然違うんですよ。」

特に子どもたちは『世間の常識』にとらわれず、体験したことをどんどん吸収するもの。
そんな素晴らしいアンテナを持っているからこそ、子どものうちに「本物」に触れておく価値は代え難いものがあります。

『子育て体験も本物志向』

もうひとつ、特徴ある事業に、赤い

羽根共同募金の助成を受けて行っている『本気*ちゃれんじ!パパ・ママ』があります。
「両親の協力のもとで「本物」の乳幼児に参加してもらい、現役の中高生たちに保育体験をしようという事業です。
最初はおっかなびっくりだった中学生や高校生が、小さな命に体当たりで挑んで、数時間で見ると成長している様子は、まさに「本物」同士の触れ合いだからこそ。
また、最初はお母さんの姿を探して泣いていた子どもたちも、少しずつお兄ちゃん・お姉ちゃんになつき始めたりと、参加したそれぞれの立場で新しい経験と発見があるそうです。



▲平成24年3月の保育体験事業「本気*ちゃれんじ!パパ・ママ」
写真提供:鯖江子ども劇場

▼これまでの活動の思い出や、これからの子どもたちを取り巻く社会環境などについて熱く語る、事務局長の米谷さん



『一緒に体験・一緒に成長』

そんな『育てる』活動をしている子ども劇場が、もうひとつ大切にしているキーワードが「一緒に体験すること」。
「例えば、演劇や人形劇を親子で一緒に観ると、そのあとの会話の盛り上がり方が全然違うでしょ?」

「その中で、相手が何を考えているかが好きなのかとかを、お互いわかり合えたり出来ると思うんです。」

親子で同じ体験をし、それを語り合えることは、子どもが人と触れ合う才能を育むチャンスであるとともに、親子の目線で見直し成長する素晴らしい機会だということかもしれません。

「育てることは育つこと。」

親子でも友達でもパートナーでも、そんなふうに関わっていったら、もしかすると、イジメも虐待も差別とかも、世界からなくなるかもしれないですね。」

そんな米谷さんの言葉に、親子、家族、地域を越えた、大きな「母性」のようなものを感じた取材となりました。

〒916-0024 鯖江市長泉寺町1-9-20
鯖江市民活動交流センター内
TEL:0778-53-0815

基本
正会員募集中!

●代表者...林 美登里
●活動開始...1987年11月1日
●正会員数...5名(2013年3月現在)
●賛助会員...なし

ボランティア募集中!

◎活動目的
優れた芸術の鑑賞等を通し、文化の創造発展と、子どもの健全な育成、豊かな社会の実現を目指しています。

これまでにも
こんな活動もしています

- ◆キャンプ&ワークショップ
子どもたちを対象に、様々な体験型のキャンプやワークショップも開催していました。
- ◆子どもの権利条約の勉強会
- ◆鯖江市内の小学校への演劇鑑賞作品紹介
これまで数多くの“ホンモノ”を観てきた“目”を活かして、子どもたちに良質な舞台作品を紹介。
候補となる様々な劇も、事前に県外に出かけて鑑賞、評価をしています。

オシャレに街を クリーンナップ!!



エックスジーシー
XGC

まちづくり 環境 教育 その他

▲今日も拾ったぞ〜っ☆ 写真提供：xGC

「市民活動って、どういふものなんですか？」
おおよしはら
大葎原さん、XGCの活動もオシャレで素敵な市民活動ですよ。
そんなXGCってどんな集まりなのか、興味ありませんか？

『えっくすじーしー？』

「GC(ガベージコレクションション)」を直訳すると『ゴミ収集』となる、この聞き慣れない言葉は、元々はコンピュータ・プログラミングの用語。ソフトウェア会社に勤める、代表の大葎原(おおよしはら)さんが、まずは会社の仲間に向けて持ち上げたこの集まりは、元々『SGC』でした。「回を重ねて、鯖江だけじゃなくてもいろんなところで、いろんなやり方であってもいいんじゃないかと思って。」鯖江のSを、いつでも、どこでも、どんな方法でも、という意味を込めて、Xに変えたのだそうです。

『無いんら つくっちゃえ!』

会社以外でも、いろんな人たちが交流したいと考えていた大葎原さん。テレビで見た、都会の若者たちが集まり、ゴミ拾いしているのをイメージして、ふくい春まつりでのゴミ拾い事業に参加したところ、そのイメージとはまったく違ったものでした。

「特に他を探したわけでもないんですけどね。」
最初は、団体を作るという意識はありませんでしたが、回を重ねるごとにクチコミで人が集まってきました。「人が集まるためのひとつの目的としても、似た価値観を持つ人に集まってもらうという意味でも、ゴミ拾いというフィルターを通すことが重要だと思います。」
こうして、XGCがその活動を始めました。

『オシャレにゴミ拾い?!』

「とにかく、いろんな人たちと交流したかったので、気軽に集まることのできるようにしたいと考えました。」
清掃やゴミ拾いという、どうしても額に汗しながらの重労働をイメージしがちになってしまいます。「やりたい人たちがやりたいから集まっている。だから楽しみながらできるんですよ。」
そういった取り組み方が、『オシャレに』という言葉に込められているようにも思えます。
特に参加するための条件は設けていませんが、

「20代の人メインですね。女性も多いです。」
家族を連れて参加する方もいらっしゃるそうです。

『人とつながる場所に』

「これは、実際に活動を始めてから感じたことなんです。」
XGCのフェイスブックページにはこうあります。
『ゴミ拾いしてみると、様々な魅力がある事に気付きます。』
・達成感がある
・いい運動になる
・参加者同士、友達の輪が広がる
・地域に対する 思いやりの心が生まれる
・ゴミ問題について考えられる
・大きくも小さい
一人の力を実感できる』



代表の大葎原さん



▼日野川でラフティングしながらゴミ拾い 写真提供：xGC

きっと意識していたわけではないにしても、単にワイワイ騒げるだけでなく、こういったことを一緒に感じられる、そんなつながりを作りたいかっただいかもしれません。
『同じ思いを共有できることが、人とつながること』
XGCとは、そう思う人たちが集い、そういうつながりを育む場なんだと感じました。



▲ゴミが20袋になることも 写真提供：xGC

はじめてのインタビューが、2010年の10月。今回、OSANPOに記事を掲載するにあたり、再度インタビューをさせて頂きました。
この2年数ヶ月で、どんなふうになったのかな?と思いつながらのインタビューでしたが、いい意味で以前と変わらず、さわかやかにコツコツと肩に力が入らない姿勢から、こんなふうに市民活動ができたらホントにいいだろうな。ふと、そんなことを感じました。
「あと50年続けたいですね。」
26歳の大葎原さん。
お子さんやお孫さんと一緒にできるまで、ぜひ続けてくださいいね。

〒916-0041
鯖江市東鯖江1丁目

http://ameblo.jp/xgc
xgc@hotmail.co.jp

●代表者…大葎原 嵩昌
●活動開始…2009年6月14日

◎活動目的
ゴミ拾いを通じて、人との交流の楽しみ、地域に対する思いやり、環境意識の向上などを目的としています。

正会員募集中!

◆たんなんFM放送中のレギュラー番組『xGC』

たんなんFM [79.1MHz]で、毎月第3土曜日12:30~13:00に放送中の、xGCレギュラー番組。
代表の大葎原さんがパーソナリティーをつとめ、活動の報告・次回予告をはじめ、環境関係の話を交えながら、ゲストの方とおしゃべりしています。

これまでこんな活動もしています

これは、東京の認定NPO法人『日本NPOセンター』が、株式会社損害保険ジャパンとタッグを組み、全国47都道府県で展開している『いきものが住みやすい環境づくり』を行うプロジェクトで、平成24年度の福井県では、さばえNPOサポートが事業の窓口を務め、越前市の市民活動団体『水辺と生き物を守る農家と市民の会』がイベントを実施。それをサポートする形で『NPOえちぜん』『越前市』と

抜けるような青い空。深い緑に囲まれた越前市山あいの溜池には、子ども達の頃、虫網を持って走り回ったような懐かしい日本の夏が凝縮してしまっている。そこに、竹の釣り竿と、餌のスルメを手に集まった数十人の親子の姿。SAVE JAPANプロジェクト『ザリガニ捕獲大作戦☆』の始まりです。

越前市の坂口・白山地区は、日本で数カ所しか確認されていないアベサンショウウオの棲息地。地元で保護に当たる人々の間で『アベちゃん』と呼ばれる愛されるこの稀少生物は、侵略的外来生物のアメリカザリガニによる絶滅の危機が叫ばれています。

いった、様々な立場の組織が集結しました。



▲溜池3つの釣果は合計867匹!



▲アベちゃんを守るため総勢150名が大集合

アベちゃん。 ぼくたちは キミの力に なれたかな?

今回の『大作戦』の目的は、市民の皆さんに手伝ってもらい、そのアメリカザリガニを釣って捕獲すること。イベントが開催された9月1日(土)は夏休みの最終日。会場に集まった子どもたち、そして、その時間を共に過ごした大人たちにとっても、それは、地球でただひとつの種“の大切さを見つめた、貴重な一日となったはずだ。

平成24年10月21日(土)午後、『第10回コミュニティ・レストラン全国フォーラム2012』が、鯖江で開催されました。このフォーラムでは、北は北海道から南は九州まで関係者が一堂に会し、活発なやりとりが行われました。コミュニティ・レストラン(コミレス)の提唱者である世古一穂さんの基調講演を皮切りに、初級コースと上級コースに分かれた分科会や参加者交流会も実施。各地で頑張っているお店の事例や、地域や行政との連携の話、運営に当たった課題など、貴重な情報交換の場となったようです。

「コミレス」 ご存知?



▲基調講演をする世古氏

▲質疑応答でも、運営の核心をつく内容が飛び交います。



コミレスのキーワードは「食」と「コミュニティ」。このふたつは、ともに命や生活に直接関わるものです。健康・福祉・文化・雇用・教育など、全てと関わる「ふところ」の深さは、ただ『料理を提供する』だけではなく、地域の課題解決の『センター機能』を担う可能性を秘めています。そんなお店が鯖江にもあります。嚮陽会館1階にあるカフェ『こころ』がそうです。ぜひ一度、訪れてみてはいかがでしょうかでしょう。

▲初級者向け分科会では「コミレス」の基礎をわかりやすく勉強☆

第10回 コミュニティ・ レストラン 全国フォーラム



「食」と「場」で

しあわせを

プロデュース



特定非営利活動法人
小さな種・こころ

まちづくり 環境 教育 福祉 文化 その他

福井県内でも「コミュニティ・カフェ」の草分け的存在、鸛陽会館にある『こころ』をご存知でしょうか？
このお店の運営を担い、2011年の10月に、NPO法人として独立した『小さな種・こころ』の理事長、清水孝次さんにお話を伺いました。

『こころ、オープン！』

こころは「障がい者の雇用と食育を考えた、おもしろいカフェは出来ないか」との発想から、15名の実行委員で2年間の準備期間を経て平成17年3月にオープン。

準備期間中には、ワークショップを開いたり、他のコミュニティ・レストランへ何度も視察に出向いたり、オープンにこぎつけるために、数々の苦労があったそうです。

清水理事長はこう言います。「障がい者の雇用と食育のことだけを考えてもダメ。地産地消など地域のためにもなり、おいしくないと続かないんです。」

最初2名の福井南養護学校の卒業生を含んだスタッフも、現在はチャレンジドスタッフと指導職員をあわせて、18名になりました。

こころで働きたいとの問い合わせも増え、職場としての魅力もあるお店だと伝わっているようです。

『農園も…』

今では、鯖江市下新庄町に農園を借

り、地場の野菜などを作りながら地元の人たちとの交流も盛んに行っています。

その結果、「町内が賑やかになってうれしい」とスイカを持ってきてくれたり、「この休耕地を有効に使用して欲しい」との申し出もあつたりするそうです。

見学者や取材も多く、マスコミなどに取り上げられる機会が増えているそうです。

「冬の休耕時期にも勉強会や機械のメンテナンスなど、やることはたくさんある。仲間と一緒に物事をするにも楽しさを感じる、楽しくて仕方がない。」

…と、みんながやりがいを感じている様子です。

また最近では食品関係の会社と提携して、六次産業育成にも力を注いでいます。

去年共同開発したカレーのレトルトパックは2000個が完売したとか。今年も、試行錯誤を繰り返して開発したジャムが新たに店頭に並ぶそうですが、その販売ひとつをとっても、成分検査やバーコードを作るのに時間と費用が掛かったりと、なかなか大変そうです。

◀お店は鯖江市鸛陽会館の南側



『障がいを持つ人が働ける“場”を』

清水理事長は熱く語ります。「障がいを持つ人は少なくないんですよ。障がい者の職場を確保していくことは、地域みんなで考えないといけないこと。難しいことは何もありませんが私たちがいろんなことを教わるし、それが地域の楽しさ、豊かさに繋がっています。」

健康者同士でも同じだと思いますが、障がいを持つ人たちとのコミュニケーションは非常に勉強になります。」

『尽きない冒険心』

「これからもいろんな冒険をしていきたいと思っています。農業には、まだまだニーズがあります。しいたけ農場やイノシシ牧場も作りたいたって、準備しているところなんです。」



▲「こころファーム」で穫れた野菜は、鯖江市内のスーパーなどでも販売中！ 左は完熟まちかの越のルビー
写真提供：小さな種・こころ

こころは、仕事を覚えたり、体力をつけたり、また、人とのコミュニケーション能力を身につけたりと、社会へ出るための訓練の場である、そう考えていることを強く感じました。

「こころには、カフェに農園、作業場と、人それぞれ、その人にあった働き場があるんです。みんなが楽しくできなくちゃ。楽しくなかったら、誰も来ないし、したくもないですよ。」

身振り手振りを交えて、ニコニコしながら話す清水理事長。きっとその人柄から、多くの人が集まり、応援してくれているのではないのでしょうか。

〒916-0056 鯖江市住吉町1-1-19
TEL: 0778-77-2022
TEL: 0778-54-0553 (こころ店舗)
http://ameblo.jp/cafecocoru/
http://www.cafecocoru.com/

基本
タ

正会員募集中!
ボランティア募集中!

●代表者…清水 孝次
●活動開始…2005年(法人は2011年10月)
●正会員数…40名(2013年3月現在)
●賛助会員…なし

◎活動目的
「障がい者の雇用」「地産地消」「地域交流」「食育」など様々な視点から、皆が幸せに過ごせる社会を目指します。

コミュニティ・レストランとコミュニティ・カフェ

- ①人材養成機能
- ②生活支援センター機能
- ③自立生活支援機能
- ④コミュニティセンター機能
- ⑤循環型まちづくり機能

■「コミュニティ・カフェ」は、より地域社会での“居場所”“たまり場”としての色彩が強とも言われます。

※「コミュニティ・レストラン®」は民間非営利活動団体(NPO)の共有財産として、非営利の事業につかえる名称としておくために商標登録されています。特許庁の審査の結果、2004年6月に商標原簿に登録され、同7月には商標公報にも掲載されました。

- 「コミュニティ・レストラン」(コミレス)は、「食」を核にしたコミュニティ支援を目的とするNPOの起業モデルです。
- コミュニティ・レストランは、地域の人々の多様なニーズにあわせて、「安全安心な食の提供」「障がい者の働く場づくり」「不登校の子どもの出口づくり」「高齢者の会食の場づくり」「循環型社会の拠点作り」等々のテーマをもって立ち上げて、NPOとして運営して行こうとするNPOの起業モデルです。また、食の提供に対しては「地産地消」「旬産旬食」「エコ・クッキング」を基本としています。
- コミュニティ・レストランは、以下の5つの機能を持っています。

ビジネス思考で

斬り込め！ 社会に



▶平成24年9月17日(月・祝)に開催された「自立支援スキルアップセミナー」の様子。
▼左は理事長の竹部さん、右は講師も務めた、副理事長の矢島里佳さん。



特定非営利活動法人
エヌピーエル・コミュニティ
まちづくり 教育 文化 その他

NPOや市民活動の世界では、昔から収支をあまり重視せずに事業を進めるようなこともありましたが、でも、それでは継続可能な団体運営はとても難しくなっています。
非営利の事業でも、ビジネス的発想でバランスよく運営する、それが、新進気鋭の団体、NPOエル・コミュニティの考え方です。

『エル・LOVE』

NPO法人エル・コミュニティは、できたてホヤホヤ。2012年に設立したばかりです。

『市長をやりませんか?』のポスターでも知られる『鯖江市地域活性化プランコンテスト』は、理事長の竹部美樹さんが2008年に初めて立ち上げたまちづくり事業で、昨年5回目を迎えました。

この事業を契機に、鯖江を中心に学生たちのまちづくり活動が活発化していき、『OSANPO』(出発号)で取り上げた、『学生団体With』も立ち上がっていったのです。

『エル・コミュニティ』の名前は、鯖江IT推進フォーラムで、パネリストのひとり、鯖江は愛にあふれるよ!ラブコミュニティだね!』と、発言したのをきっかけに命名されたとか。写真に写る際のポーズも決まっています、右手をL字にして写るそうです。牧野市長も自身のフェイスブックで、ポーズしているそうですよ。

『愛ある地域活性化』

この『鯖江市地域活性化プランコンテスト』:竹部さんが東京で若者の新卒採用に関わる仕事をしていたとき、都会と福井の学生との間にある、あまりにも大きなビジネススキルの格差を感じて愕然としたことが大きなきっかけになりました。

「このままではいけない。故郷の学生と大好きな鯖江のために役に立つ何かをしなくては!」

そう思い、東京に居ながら事業を企画。ビジネス的発想と方法で『第1回鯖江市地域活性化プランコンテスト』を開催しました。

この事業は、全国の著名な大学の学生が本山誠照寺に集結し、泊りがけで鯖江を良くする活性化プランを、市長になったつもりで作るものですが、第1回のコンテストの中で発表された『めがねを使ってギネスに挑戦』は、2011年に『めがねギネス』として実現した成果のひとつです。

『スキルアップ』

『鯖江市地域活性化プランコンテスト』について、
「これを企画した目的は、元々地元の学生たちのスキルアップなんです。」と語る竹部さん。

県外のスキルの高い学生たちと触れ合うことで刺激を受け、成長のきっかけにしたいと考えたのです。
「大好きな鯖江ですから、何か役に立つことをしたいと思ってますが、単純にまちづくりを学生たちにしてもらいたい訳ではありません。」

次代を担う学生たちが、スキルやレベルをアップさせていくことによって、未来の鯖江が良くなっていくと考えています。そのためにも、私が都会で学んだノウハウやスキルは、全部この子達に伝えていきたいと思っています。
ある意味、母親的な視点でコーディネートすることで、若者と地域を繋ぎ、双方のスキルアップを目指しているのが伝わってきます。

『ビジネス思考』

実は『鯖江市地域活性化プランコンテスト』自体も、個人によるまちづくりボランティアとしてではなく、企業の事業のひとつとして企画したものでした。

現在、事業は鯖江市が開催する形で

すが、資金面で企業に協力してもらう場合は、寄付ではなく、企業協賛という形でまかっています。
事業の趣旨を共有し、企業にも『仲間』として関わってもらいたいとの考え方です。もちろん、税制面などでも協賛企業の利益を考えることも忘れません。

また、就職支援事業や地域ブランド創出支援事業も手掛けていますが、参加してもらおう方やコラボしてもらう団体さんにも、好意だけに頼らず、お金を支払っています。

これは、事業を継続していくために必要不可欠な『収支計画』や『負担配分』に基づく考え方で、ここにも、竹部さんが培ってきたビジネス的ノウハウが詰まっています。



理事長の竹部さん

『ラブ・コミュニティ さばえ』

とは言い『鯖江市地域活性化プランコンテスト』が5年もの間続



▲NPOエル・コミュニティ主催「オープンガバメントサミット in 鯖江」(平成24年11月)のワンシーン。“ビジネス思考”の運営で、全国から有料で参加者を募り、独立採算での事業完了を果たしました。写真提供:NPOエル・コミュニティ

いているのは、鯖江の人々のお陰だと強く思っているそうです。
「こういう事業は、県外の学生や協賛企業さんたちに『鯖江』を気に入ってもらわないと結局続かないし発展もないと思います。」

実際、毎回鯖江の方々が發揮して下さる『おもてなしの心』や『サポート』のお陰で、本当にたくさんの方に鯖江を好きになっていただけて今がある。

学生たちもこの5年でずいぶんと成長しています。その過程を見ていけるのは本当に楽しい嬉しいんですよ。
この事業を通して、鯖江を愛する若者が育ち、地域のリーダーとなり、さらに輪を広げ、次の若者を育てていく...そんな循環をつくって広がっていきたくいです。」

ご自身も大好きな鯖江を、もっと良くしていきたい。地元の子供たちを、世界でも通用するようスキルアップ、レベルアップさせたい。

その思いに、地域の方々の愛情も加わって『鯖江市地域活性化プランコンテスト』は、まさに『愛あふれる』事業となっているのかもしれない。

〒916-0057
鯖江市有定町3丁目

http://www.l-community.com/
saba-city@takebe-m.co.jp

正会員募集中!

- 代表者...竹部 美樹
- 活動開始...2012年3月(法人は同9月)
- 正会員数...10名(2013年3月現在)
- 賛助会員...なし

◎活動目的
若者を支援し、地域活動への参加を促進することで、地域の活性化、地域ブランドの創出を目指しています。

おもちゃ病院



▲なおるかな?…なおるよね?

高齢者の生きがい対策事業の一環として、2012年2月に立ち上がったばかりの『おもちゃ病院』。この事業は、“ものを大切に使う”意味で、環境保全の側面も持っています。壊れてしまったおもちゃに再び命を吹き込む『ドクター』さんたちの活動について、清水堅さんにお聞きしました。

『フーッ!よかったね!』

取材させていただいたこの日も、お母さんに連れられて3才くらいの男の子がおもちゃ病院を訪れました。持ち込まれたのは電池で動く機関車のおもちゃのようでした。さっそく一人のドクターさんが修理にかかります。傍らで様子を見守る母子。15分ほど経った頃に「シャーッ!」と、モーターの回転と共に取り付けられた車輪が勢いよく回り出す音が室内に響き渡りました。

「オーッ!」

「そら動いた!」

「直った?よかったねー!」
それぞれの机の方からドクターさんたちの喜びの声が上がります。

もちろん満面の笑みで男の子はお母さんと帰って行きました。

『おもちゃ病院って知ってる?』

毎月第1・第3土曜日の午後、鯖江



▲おもちゃ病院の診察申込書と診療記録

基本的に修理代は無料ですが、部品代(実費)をいただくこともあるそうです。

鳴き声や音を発するぬいぐるみは、内蔵されている小さいスピーカーの破損が疑われ、新しいスピーカーとの交換作業は、電子機器に堪能なドクター、縫い合わせは女性のドクターにお願いするといったチームでの修理作業となります。

また、市内外のイベントにおいても要請があれば、1日おもちゃ病院を開設されています。

こういうケースでは、基本的にはその場で直すわけですから、力量が問われることもあるとか。



▲治療方針を検討中

『キーワードは笑顔』

ドクターさんたちを突き動かしている原動力は、直してもらったおもちゃを受け取る時の子ども達の笑顔だけです。

その子にとって大切なもの、気に入ったものが直って欲しいという強い思いとともに、あきらめていたものが直ったときの喜びの笑顔は、できなかつたことができるようになったときの喜びの笑顔に似ているとおっしゃっています。

『直せない』こともある』

日頃感じている悩みや思いをお聞きしてみました。

「プレッシャーを感じる時もありますね。自分以外の人だったら直すことができたのではないかと。正直、レベルの差を感じることがあります。」

技術を磨きたいと思って、仲間とおもちゃの製造現場へ見学に行こうと探したことがあります。今では、おもちゃの製造、生産はほとんどが海外で見学も部品調達も難しい状況にありますね。

電子基板を使っているおもちゃが増えてもいます。また、持ち込まれても直せないものがあります。例えば、エアガンなど玉が飛び出すもの(いわゆる飛び道具)や、100V電源で動く

ようなものは、おもちゃとしては扱わないことになっていっていますよ。」

『眠っているおもちゃはありますか?』

最後に、清水さんがこんなことをおっしゃっていました。

「子ども達のおもちゃは、それで遊ぶ時期が2、3年ほどだと思えます。遊ばなくなったおもちゃ、壊れてしまったおもちゃ、部屋の奥にかたづけられ

たおもちゃなどを、もっと再利用できないかと思っています。

メンテナンスや修理を施し、諸施設で使ってもらおうと大変喜ばれます。

眠っているおもちゃをもっと持ってきて欲しいと思いますね。」

今回、とにかく『おもちゃ病院』を皆さんに知ってもらおうと一番だと、快く取材に応じていただきました。

この3月にはドクターの技能向上のため、中級講習会も実施。今後は、例会(活動日)を増やしていくという計画もあるそうです。おもちゃを通じたコミュニケーションの手段としての『おもちゃ病院』のますますの発展をお祈りしています。

▼お話を伺った清水堅さん



▲「日本おもちゃ病院協会」が発行する会員証。講習を受けた「ドクター」の証しです。

事業のお問合せ先

〒916-0033 鯖江市中野町73-11
鯖江市環境教育支援センター

TEL:0778-52-0050

econet@ecoplaza-sabae.jp

◎事業目的
壊れたおもちゃを修理することを通じ、世代間の交流と、高齢者の生き甲斐発見の機会を作り出すこと。また、ものを大切に使うことで、環境に対する意識の醸成も目指しています。

『OSANPO』2歩目『いかがでしたでしょうか?』創刊の『出発号』発行から1年あまり。今年度の冊子作りに参加した委員会の面々が、2月某日、鯖江市内のあるお店に集合し、これまでの道のりを振り返る座談会を開催しました。

メンバーの本音も見え隠れする覆面企画(笑)を、ぜひお楽しみ下さい。



☆はつめいの『おしゃべり』

- B 今年、取材初体験のメンバーもいますけど…どうでしたか?
- D 自分の場合、賑やかな会場での取材だったんで、せっかくの音録が聞き取りづらかったのがね。あと、話題があっちこち飛ぶこともあったでしょう?
- F あ、それはうちの取材でもありましたよ。それだけ、いろんな「思い」があるってことですね。
- A だよ。それが市民活動の原点みたいなんだから。
- E 僕なんかねえ、何を聞いたらいいかも分かんないまま終わっちゃったなあ。(笑)
- B でも、いち早く、面白い内容の草稿出してもらえてましたよね。
- F 自分も早めに出したんだけど…そうそう。おかげで「早く書かなきゃ」ってメッチャ焦った。
- F でもあれって、少しでも早く肩の荷をおろしたかったという…(笑)わかります。でも文章読んでても、去年と比べて、皆さん力付けてきておられるなって思いましたよ。

☆『老舗』と『若手』

- B そう言えば、今年の取材の中で、ほんやりと思ったことがあって…いわゆる『老舗』って言われるような団体さんと、若い子達が最近立ち上げた団体さんとして、一種、『世代の違い』みたいな感じしたことない?
- A なんて言うか…ボクラ事業する時ってガンガン気合い入れて「やるぞーっ!」とか思うのに、若い代表さんとかだと「面白いプロジェクトだから始めました。できたら孫と一緒にできるくらいまで続けたいなあ〜」みたいな、飄々とした感覚で活動してたりしてね。
- A ああ、あるかも。
- I 私が取材した先も、そんな感じの部分ありましたよ。
- A 要は『好きだからやっています』ってことだよ。それ自体は老舗とか若手とか関係ないことだろうけど。

- C 強いて言えば、すごく『自然体』みたいな感じ?
- B それそれ!
- E なるほど、そうかもしれないなあ。今の若い人たちは、社会的な成果とかより、自分の人生の充実の優先順位が高いとか聞いたことがあるしね。
- B 個人的には少し羨ましい。
- J 確かに。ただ、デメリットもありそうだけど。
- A 例えば、持続性とか安定性とか? 五年後に同じ形で続いている保証はないよね…みたいなこと?
- J 特に行政とかだと、そういうの重要視するでしょ?
- I 今『新しい公共』とか言って、これまで行政が担当してた『公共サービス』の一部を、民間目線のNPOとかに担ってもらおうって動きがあるけど、不安定な団体さんだと、そういうのには向いてないだろうし。
- I もちろん無理し過ぎないで『やらされてる感』がないってのは、ホントに魅力的だけだなあ☆…
- A でも、若い人の中にも、もっと仲間を増やしたいからって、規模が大きくなっても持続性のある『団体のあり方』に苦心してるところありましたよ。
- A もちろん、若い世代の団体さん全てが、『自然体』な運営してることじゃないよね。

- C 世代とは関係なしに、ワンマンな代表さんが動かしてるところもあれば、役割分担でまわしてるところもある。
- I 実際『老舗』のなかになんかあって、いろんな変化の道のりをたどったところもあるわけだ…
- H 世代的な話も含めて、それも団体の個性ってことじゃない?
- G ですよ。
- J ただ、うちの団体が『中間支援』を目的に活動していることを考えると、そういういろんな団体さんの『個性』を活かしながら、上手にコーディネートしたり、繋げたりする能力が必要ってことじゃないのかなあ。
- A 我々も、まだまだ精進!…ってことだね。(笑)

☆これからの『OSANPO』

- B 一応、毎年最低でも一冊ずつは出していこうね☆…ってことになってますよ。
- J 1年に2冊以上ってのは、さすがに余力が…(汗)
- B うちの委員会って、他にもたくさん抱えてるし。
- J うん、そう。頑張ってる! でも、その全てを『楽しんで』やるのが大切!
- I そこはいつも感じてますよ。しょーもないことにも全力投球なメンバーが多くてステキ☆(笑)
- J 『しょーもない』っていえば、シヤレで出てきた『OSANPO』のスピノフ企画とかも多いですよ。
- H そういう話になると、メンバーの発言も増えますよね。(笑)
- C 真面目な話、『OSANPO』の誌面に、もっと他の団体さんの協力で創るページとかできないですかね?
- G 『OSANPO』以前から、広報媒体の中でそういう話はありましたよ。
- J ですよ。…確かに、コラボ冊子企画みたいに、初めっからオープンな本を作るのならアリだと思うけど…個人的に『OSANPO』には、ちょっと違う感触があるんだけど。
- A まあ、そのあたりは、それぞれで考え方もあるだろうから、フレキシブルに考えていてもいいんじゃない?
- C とにかく、市民の皆さんにも団体さんにも、喜んでもらえるものが出来ればね☆
- B そう。
- I 去年の『出発号』の後、何人もの人から「いい本出したね!」って言ってもらって、ホンっとに嬉しかった!

- J わかるっ!
- A そのあたり、我々、意外と単純やから☆(笑)
- A いや、ナマで耳に出来る応援は、何よりのエネルギーだもの。
- J その繋がりを大事にしながら、これからも謙虚さを忘れずに頑張っていきたいと思います!
- J ……ということで、平成25年度も、次号に向けて取材活動を続けて参ります。お邪魔した際には、ぜひ宜しくお願いください!





『OSANPO』では、これからも鯖江の市民活動団体さんを、どんどん掲載させていただきたいと思っています。「ぜひ、私たちのことも取材して！」という団体の皆さんは、さばえNPOサポートまでご一報下さい。

『OSANPO～2歩目～』

- 2013年3月 初版発行
- 発行人：広報特別委員会
- 発行所：特定非営利活動法人
さばえNPOサポート
福井県鯖江市長泉寺町1-9-20
TEL:0778-54-7055
FAX:0778-54-7058
E-mail: info@sabae-npo.org
- <http://sabae-npo.org/>

